

第3表 飼い直し舎飼期に要した飼料量養分量（8週56日間）

試験牛 No.	イタリアン乾草		ビートパルプ		濃厚飼料		D. C. P			T. D. N		90% D.M	
	総量	日量	総量	日量	総量	日量	総量	日量	総量	日量	総量	日量	
1	54	0.96	184.7	3.30	211.2	8.77	34.3	0.61	301.4	5.38	432.8	7.73	
2	55	0.98	167.5	3.29	209.9	3.75	33.5	0.60	289.4	5.17	415.8	7.43	
3	55	0.98	188.6	3.37	203.0	3.62	33.6	0.60	298.7	5.33	429.6	7.67	
4	53	0.95	168.2	3.00	198.9	3.55	32.6	0.57	281.3	5.02	404.9	7.23	
5	54	0.96	184.0	3.29	182.4	3.26	31.0	0.55	280.6	5.01	404.5	7.22	
平均	54.2	0.97	178.6	3.05	201.1	3.59	33.0	0.59	290.3	5.18	417.5	7.46	

期とも順調に発育し得た。

3. 飼い直し舎飼時回復

飼い直し舎飼回復に要した飼料量、養分量は第3表のとおりで、イタリアン乾草、ビートパルプ、濃厚飼料kgあたり17円、24円強、31円弱で計算した場合1頭あたり、11,440円、1日約200円を要したが、いわゆる補償発育も加わり、この期間中に急速に体重が増加した。

考 察

1. 離乳後必ずしも良好でない状態で濃厚飼料無給与の放牧を行なつたが、この場合短期間の飼い直し舎飼により急速に発育を取り戻し、その後の放牧に対する適性を十分に得ることが認められた。
2. 離乳後の放牧育成の場合とくに体重と体高の推移を留意すべきで、放牧育成中体重がその家畜の標準値の何%以下となつた場合その後の正常な発育を阻害するか不明であるが、この例では80%以上であれば飼い直し舎飼により、補償発育をとげ爾後正常な発育状態となつた。また育成牛の栄養状態を判定するものとして体重/体高を検討すべきことが報告されているがこの例についても同様な所見が得られた。

(第2図、第3図)

第2図 体重・体高の発育標準（中線）に対する比の推移

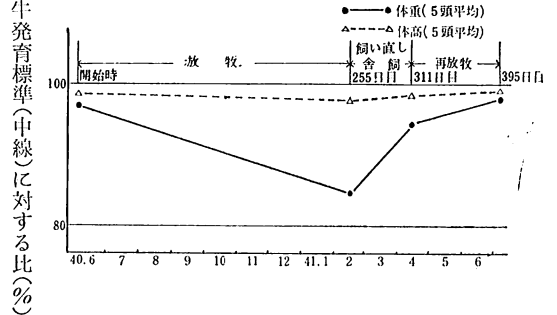


図3 体重/体高

